

郷土資料館「海老名市温故館」100年の歩み

海老名市教育委員会

郷土資料館長 押方みはる

はじめに

「海老名市温故館」は海老名市立の郷土資料館で、昭和57（1982）年に市の条例で位置づけられて38年がたつ。地方自治体が設置する郷土資料館としてとりわけ古いわけではないが、実はそれ以前から「温故館」は存在し、その開設は大正10（1921）年にさかのぼる。「温故館」は開設から現在に至るまで、場所、建物を変えながらも存続し、令和3（2021）年3月末には創立から100周年を迎えることとなった。

なお、「温故館」という名称は、温故知新に由来することは想像できるが、命名が館の創設にかかわった海老名小学校長の中山毎吉であったのか、あるいは他の誰かであったのかわかっていない。現在条例上は「海老名市温故館」が正式名称ではあるが、古くからの呼び方である「温故館」が通称となっている。

神奈川県内に設置されている歴史系資料館のうち、古くさかのぼるものは昭和3（1928）年の鎌倉国宝館、昭和5（1930）年の神奈川県立金沢文庫が挙げられる。神奈川県立博物館の設置はかなり後の昭和42（1967）年であるが、全国の県立博物館の中でも決して遅くはない。全国的にみれば、明治5（1872）年の湯島聖堂大成殿での博覧会を契機とした東京国立博物館をはじめ、明治年間に奈良、京都に国立の博物館は設けられるが、県立博物館となると大正時代に開設されたものは京都府、山口県など数少なく、当時人口約9千人であった「村」による郷土資料の展示施設としては全国的にみても極めてまれなものであったと思われる。

設立の経緯

温故館の成り立ちは、大正時代に史蹟名勝天然記念物保存法が成立し、相模国分寺跡の保存が推進されたことと深くかかわる。相模国分寺跡は新編相模国風土記稿に礎石が点在する鳥瞰図が掲載されるなど、江戸時代後期には遺跡として認識されていた。明治になると研究対象として論文も発表されるようになる。



海老名市温故館（平成23年）

史蹟名勝天然記念物保存法が成立した大正7（1918）年には、既に相模国分寺跡の保存は海老名村を挙げての事業として取り組まれていた。具体的には神奈川県の補助事業として、大正7年から3年計画で申請された「国分寺旧蹟及び関係史蹟保存事業」にみる事ができる。この事業の一つに「陳列所」の設置があった。

事業計画書には「左記遺物ヲ買収シ、陳列所ヲ設ク。一、石器時代ノ遺物 一、国分寺ノ遺物 一、陳列所」とあり、予算内訳には500円、建物十坪と記されている。計画最終年度の大正9年度事業計画書では「一、遺物陳列所建築 大正七年度本村保存事業ノ内、買収セル国分寺遺物四十七点、石器時代遺物三百八十八点、及本年度買収スベキ遺物約五十点、其他公衆ノタメ参考資料タルベキ図書等を陳列スベキ家屋一棟ヲ建設スルコト。陳列所建坪約六坪。亜鉛板葺トシ、窓ハ金銅張硝子戸、床ハ板又ハコンクリートナスコト。」とし、経費は300円としたものの、補助金事業精算書によれば「陳列所建物 壹棟 亜鉛平板葺（方形造り）桁行壹丈貳尺 奥行九尺 此坪数參坪 床及土台下コンクリート叩キ（中略） 陳列台 壹台（中略） 器具及箱類八個」とあり、建物の広さは半分になり、決算額も394円40銭と予算をオーバーしてしまったようだ。

この3坪の「陳列所建物」がまさしく温故館のはじまりで、場所は海老名小学校敷地内に建築され、神奈川県知事井上孝哉の書による「温故館」

表1 温故館変遷表（No.は写真番号と一致する。）

No.	設置年	所在	備考
1	大正10(1921)年3月	海老名市国分(海老名小学校敷地内)	関東大震災で被災
2	大正14(1925)年	海老名市国分1934(海老名村役場敷地内)	
3	昭和30年代	海老名市国分1932 国分寺跡中門付近	役場の増築に伴い移転
4	昭和46(1971)年7月	海老名市国分248 現・中央1丁目	町役場移転に伴い移転。プレハブ造
5	昭和57(1982)年10月	海老名市国分南1-19-36	道路拡幅に伴い移転。旧海老名村(町)役場を改装
6	平成23(2011)年4月	海老名市国分南1-6-36	旧海老名村(町)役場を移築



1 設立当初の温故館（大正10年頃）（左）、大正時代の絵葉書にみる温故館



2 役場敷地内の温故館（昭和30年代か）

3 相模国分寺中門跡付近の温故館（昭和40年頃）



4 旧図書館付近プレハブの温故館（昭和47年頃）篠崎信氏撮影

5 旧役場建物を改装した海老名市温故館（昭和57年）

の扁額が入口に掲げられた。温故館設置の目的は補助事業書類にみるとおり、相模国分寺跡と相模国分尼寺跡の出土遺物、また村内の石器時代（縄文～古墳時代）遺物を収蔵展示するもので、いわば「考古資料館」であり、「相模国分寺跡資料館」であった。

他に補助事業として用地買収、石碑の設置、遺物買収、絵葉書や図書の刊行にも取り組み、村を挙げての相模国分寺跡保存事業が実を結び、大正10年3月3日に史蹟名勝天然紀念物保存法施行後最初の国指定史跡の一つとして告示に至ったのである。

相模国分寺跡保存事業の中心的な役割を担った中山每吉は相模国分寺の研究を行う中で、多くの研究者と交流しており、中でも東京帝国大学の国史学者、黒板勝美の影響を受けたとみられる。黒板は「史蹟遺物保存に関する意見書」（黒板1912）の中で遺物はできるだけその旧地で保存し、アクロポリス博物館やオリムピア博物館のように小博物館を建てて保存を図るべきと記しており、この小博物館設立論が「遺物陳列所」設置計画につながったのではないかと考えられている（岩崎1996）。

温故館の変遷

大正10年3月に海老名小学校内に新設された温故館は、補助金で購入した約500点の遺物を収蔵展示し、小学校の授業でも使用されたが、大正12（1923）年の関東大震災で被災した。その後温故館の場所は5回も変わる事となり（表1）、紆余曲折を経て現在に至っている。度重なる移転には、村から町、町から市へと、時代が移り変わる中で、公共施設の移転や新設、道路整備などまちの変容が大きく影響している。

昭和57年「海老名市温故館」の開館は、保存運動により解体を免れた大正7年建築の海老名村役場を改装してのことである。これまでの10㎡にも満たない小さな施設から、2階建て400㎡強の延床面積をもつ郷土資料館へと大きく発展した。これに伴い、考古資料だけでなく、民俗資料の収集保存、展示を行うこととなり、市民に資料寄贈の呼びかけも行った。開館翌年の昭和58（1983）年には「養蚕展－カイコから生糸ができるまで－」を開催し、以後年に1回特別展を実施、考古や民俗など各回テーマを変え30回実施した。村役

場建物は建築物としても評価され、平成2（1990）年に「かながわの建物100選」に選ばれている。

しかしながら老朽化した役場建物は耐震不足により、平成18（2006）年秋から一時休館を余儀なくされ、温故館も存続の危機となった。約2年にわたり郷土資料館の在り方と役場建物の保存について検討が重ねられたが、市民等による役場建物保存運動もあり、結果として元の場所から西に約200m離れた国分寺塔跡の西側に移築し、平成23（2011）年4月に再オープンとなった。なお、休館の間は一時的に海老名市文化会館1階に郷土資料展示コーナーが設けられた。

温故館6度目の開館目前の平成23年3月に起きた東日本大震災では、海老名市も震度5弱の揺れに見舞われた。移築前であったら何等かの被害があったであろうことを思うと、まさに間一髪のタイミングだった。

3坪の小さな建物ではじまった温故館は、今ではこの郡役所風建物のイメージがすっかり定着している。大正時代に相模国分寺跡保存施策の中心となった村役場建物が温故館となったことについて、中山每吉の業績や人となりを調査した岩崎春江は「不思議な因縁」（岩崎1996）と称するが、言葉にはできない強い運命のようなつながりを感じるのである。



昭和57年開館の海老名市温故館の展示状況
1階考古資料（上）、2階民俗資料（下）

近年の取り組み

平成23年4月の移築以降、年1回開催していた特別展を「企画展」という名称に改めて継続し、令和2年度には40回を超えた。この他、資料展やミニ展示、収蔵品展なども年に1～2回開催し、収蔵品や資料調査の成果を紹介している。また平成25年度からは、企画展の展示解説も実施し、展示資料の詳しい説明や、展示に至るまでの調査成果などを紹介している。展示にあたっては神奈川県教育委員会や、（公財）かながわ考古学財団との共催で実施した回もあり、発掘調査担当者による展示解説やフロアトーク、ワークショップ（土器模様の缶バッチづくり、プラスチック粘土で勾玉ストラップづくりなど）の開催、関連テーマのシンポジウムや講演会など、市だけでは不可能な取り組みを行うことができています。他団体との共催は、企画展についてより広い範囲への広報が可能になることもメリットの一つとして感じている。

令和2年度第41回企画展「えびなの観音さま」は初めて県立歴史博物館の特別協力を得て開催し、県立歴史博物館の特別展「相模川流域のみほとけ」に出品された龍峰寺千手観菩薩立像を中心に展示を行った。他館の展示と関連する企画展の開催は初めてであったが、サテライト会場のように、重要文化財の千手観菩薩立像の詳細や、お像に付随するストーリーなどについて理解を深める展示になったのではないかと思います。

また、今回は感染症拡大防止対策の苦肉の策として、非常用の放送設備を利用し、初めて館内放送による展示解説を実施してみた。密を防ぐために回数も週2回とし、普段より多く行ったが、結果として多くの方に展示解説を聞いていただくこ



展示解説の様子（令和2年）

表2 海老名市温故館展示履歴

回	展示名	実施期間
第1回	養蚕展－カイコから生糸ができるまで－	1983年7/26～8/31
第2回	えびなの遺跡	1983年11/15～12/4
第3回	郷土の資料展	1984年7/24～8/31
第4回	縄文土器－縄文土器とその編年－	1985年2/5～3/3
第5回	郷土かるた展	1985年7/24～9/1
第6回	相模国分寺	1986年3/27～4/27
第7回	相模国分寺と縄文土器	1986年7/23～8/31
第8回	海老名の板碑	1987年2/20～3/31
第9回	農具 今・昔	1987年8/1～9/30
第10回	海老名の絵馬	1988年2/2～3/27
第11回	海老名の道祖神	1988年10/25～11/20
第12回	写真が語る海老名の歴史－明治～昭和－	1989年8/22～9/30
第13回	相模国分寺 尼寺を掘る	1990年2/20～3/18
第14回	臼作りの道具	1990年10/23～11/18
第15回	中山毎吉 ー相模国分寺研究の先駆者ー	1991年10/8～11/10
第16回	独楽とだるま	1992年3/10～3/29
第17回	いしえびとの置き手紙－古代たかくら郡の墨書土器－	1993年3/2～3/31
第18回	衣の暮らし－糸車から花嫁衣裳まで－	1993年10/19～11/21
第19回	知られざる海老名の古墳	1994年11/15～12/18
第20回	戦中戦後の海老名	1995年10/24～11/26
第21回	海老名本郷遺跡	1996年10/29～12/1
第22回	のぞいてみよう海老名の江戸時代	1997年10/22～11/30
第23回	旧石器人のくらし ー後期旧石器時代柏ヶ谷長ヲサ遺跡の発掘調査からー	1999年2/24～3/21
第24回	ー明治資料で綴るーえびな米ものがたり	1999年10/27～11/28
第25回	縄文の美－海老名の縄文遺跡から－	2001年3/6～3/25
第26回	学校ノ ハジマリ ハジマリ～	2001年10/30～11/25
第27回	相模国分寺創建	2002年11/7～12/22
第28回	新収・未公開資料展－遺物古文書から知るむかし世相と世情－	2004年3/9～3/28
第29回	海老名の自然～植物～わがまちの身近な草花	2005年3/1～4/3
第30回	1700年の時を経て、今ここに～国指定史跡 秋葉山古墳群～	2005年10/18～11/20
第31回	海老名の記憶遺産 ～中山耕一郎氏の記憶画と100年前の人々のくらし～	2012年3/5～5/27
第32回	いしえびとの意匠～文様から読み取る縄文・弥生文化～	2012年10/1～12/26
第33回	災害を語り継ぐ～海老名市域に起きた自然災害～	2013年11/1～2014年1/26
第34回	海老名の中世武士～遺物から見る足跡～	2014年10/4～12/21
第35回	戦地からの手紙～故郷 海老名への思い～	2015年7/18～8/16
第36回	市制施行45周年記念事業 海老名ノスタルジアー昭和30～40年代の海老名ー	2016年10/25～12/25
第37回	河原口坊中遺跡展 大山を望む弥生のムラ	2017年10/19～12/10
第38回	海老名村役場建築100周年記念 海老名の近代建築と古民家	2018年10/27～12/9
第39回	江戸時代の旅 ～杉久保村 治右衛門さんのお伊勢参り～	2019年8/15～9/29
第40回	新発見！相模川の低地で見つかった古墳と玉	2019年11/1～2020年2/2
第41回	えびなの観音さま	2020年10/1～12/6
資料展	海老名市温故館新収蔵資料展2013	2013年2/1～4/30
	遺跡発掘新資料展2013～海老名を掘りました～	2013年7/1～9/1
	指定後60周年記念・県指定天然記念物の今昔	2015年3/14～5/6
	海老名の庚申塔～石に彫られた申さるたち～	2016年1/4～1/31
	震災～大地に刻まれた痕跡～	2016年8/8～9/30
収蔵品展	海老名の近世街道～大山道をたどって～	2017年8/1～9/18
	海老名温故館・市立歴史資料収蔵館所蔵品展 絵図の世界～江戸時代の海老名の村々～	2014年3/15～4/20
	郷土かるたのいろいろ	2017年8/1～9/18
ミニ展示	記念の盃～ハレの器・ケの器～	2019年1/8～3/31
	こまいぬさん あ こまいぬさん うん	2018年1/6～3/1
	海老名氏参上！	2018年8/21～10/14
その他	歩いてみよう海老名の横須賀水道みち	2020年2/22～8/31
	平成27年度かながわの遺跡 巡回展 縄文の海 縄文の森 縄文時代のえびな森 ¹	2016年2/5～3/6
	郷土資料展示コーナー（海老名市文化会館1階）	
	海老名に近代がやってきた～明治前期の海老名～	2008年3/26～4/20
	近代化がもたらしたもの～戦争と海老名～	2009年3/25～4/19
平成20年度 寄贈資料展	2009年5/1～7/31	
描かれた海老名～写真と絵図で探る～	2010年3/17～4/19	

とができ、新たな成果となった。

この他、感染症拡大防止対策の一環として、小学生向けに昔の道具を紹介した動画「温故館へようこそ～むかしの道具編～」もYouTubeで公開し、好評を得ている。

おわりに

この100年の間に、災害、戦争があり社会情勢は大きく変わった。多くの博物館や資料館ができる一方で、存続が難しくなってしまった施設もある。そして令和2（2020）年のコロナウイルス感染症拡大に伴う影響は計り知れず、これからの100年どころか、この先数年の見通しさえ難しくなっている。感染症対策によりデジタル化によるWeb上での資料公開は一層進むものと思われ、利便性は高まるかもしれない。しかし実際に資料を見て、触れて、体感することは何にも代えがたいものである。今後も来館しなければ得られない場の提供を大切にしていきたい。

【参考文献】

- 須田誠 2012 『史跡相模国分寺跡 史跡相模国分寺跡環境整備事業に伴う発掘調査報告書 第1分冊』 海老名市・海老名市教育委員会
- 岡本勇ほか 1995 『相模国分寺研究の先駆者 中山每吉—その人と業績』 海老名市史叢書1 海老名市
- 中山每吉・矢後駒吉 1924・1934 『相模国分寺志』 海老名村
- 須田英一 2014 『遺跡保護行政とその担い手』 同成社
- 須田英一 2011 「明治期～昭和戦前期における地方の文化財行政をめぐる動向—神奈川県行政機構・法令の変遷と遺跡保護の担い手を中心に—」『考古論叢神奈河第19集』 神奈川県考古学会
- 岩崎春江 1996 「史跡保存のキーマン—黒板勝美・有吉忠一・中山每吉—」『えびなの歴史 海老名市史研究第8号』 海老名市企画部市史編さん室
- 黒板勝美 1912 「史蹟遺物保存に関する意見書」『史学雑誌 二十三（5）』 史学会
- 神野祐太・千葉毅 2018 『神奈川県立博物館・神奈川県立歴史博物館50年のあゆみ』 神奈川県立歴史博物館



ワークショップで制作した勾玉ストラップ



公開中の動画「温故館へようこそ～むかしの道具編～」